
未来シミュレーションゲーム

DIOrennji

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

未来シミュレーションゲーム

【Nコード】

N0282BA

【作者名】

DIOrennji

【あらすじ】

僕こと住友心愛はとある事情で『変化』が嫌いだった。周りに気を使い、平均を目指し、善人である毎日。しかしある何気ない日、いつものようにパソコンを開いてみると、一般的にギャルゲと呼ばれるようなシミュレーションゲームのデータが。導かれるように起動してみると、実はただのゲームではなく、僕を主人公としたリアルと全く同じ設定のゲームだった…。

事件に巻き込まれ、もしもゲームで真実を見つけられずトゥルーエンドに到達出来なければ、待つのは“死”というバッドエンド達。

僕はただ、変化のない普通が欲しかったただけなのに――。気分とその場のノリで書いてるので、更新はランダムで文章の長さによらずに異なります。

6月27日「未来の事件」(前書き)

微弱のグロあります。

6月27日「未来の事件」

「う、嘘だ…!？」

僕は目の前にある“ソレ”を見てしまった。赤色のトマトジュースにしてはぬめりのある液体を撒き散らし、辺りの温度を一段と下げている物――。

死体。それも先程まで生きていた。

「ッ――お、えええ」

普段からこういう絵に馴れていた。つまりゲーム脳のお陰で容易に理解出来てしまった僕は、実物を前にして嘔吐しかける。

死体に驚いたというのもあったし、様々な感情が渦巻いたというのもあったけれど、単純に。

グロテスクすぎる。

どうして僕は、こんな事に巻き込まれたのだろうか。全ては、アレが来てからおかしくなった――。

6月24日「学校」

桜田心愛。それが僕の名前。

女の子のような名前だったので、小さな頃はよくいじめられたりと苦労した。

その頃に、どうしてこんな名前にしたんだと両親に聞いてみたら。

「心の底から人を愛せる人になって欲しいから」

という安直すぎる由来に、子どもながら苦笑いをしたのを覚えている。

そんな一種の思い出を振り返りつつ、いつも通り放課後を迎えた教室で、自分の席で座っていると。

「心愛ー！」

僕の名前を呼ぶ声が、一時的に騒がしくなっている周りの雑音の中聞こえた。一周するように見渡してみると、ある少女がこちらに近づいて来ている。

「質桜さん、どうしたの？」

嬉しそうにやって来た少女に、僕も笑顔を向けながら聞いてみる。彼女は質桜心亜。僕とは下の名前が同じ友達だ。

「やったよ心愛ー！ ついにあのゲームをクリアしたのー！」

「うん、おめでとー」

眼を輝かせながら息を荒げる質桜さん。

彼女とは高校に入る以前の友達で、よくこうしてゲームやアニメなどを話したりする。

「くうー、辛かった！！ 強かった！！ 半端じゃなかった！！」

右手に握りこぶしを作り、グツと堪える質桜さん。楽しそうだなあ…。

「幾多の苦勞を乗り越え、私はクリアした！！」

「おー」

ふふふ。とドヤ顔で佇む。

「そろそろ帰ろうか」

僕がそう切り出すと、質桜さんはいつもの表情に戻って。

「そうね」

と言ってくれるのだった。

6月24日「帰宅路」

僕は変化が嫌いだ。

変化は僕から何かを奪っていく。今も昔も彼らは無慈悲に、いとも容易く行う。だから僕は変化を好まない。

例えば僕は人が嫌がる事も進んでやるし、困っているのなら助ける。そうしておけば良い人だと思われるし、なにより直接関わる事によって変化が拡大しない。

「いやー、今日は何しようかなあ」

そんな事を考える僕の隣では、学校指定の黒光りする四角のカバンを上下に振りながら歩く少女が一人。
質桜さんだ。

「勉強は大丈夫なの？」

半分心から、残りは作り笑い。

「ふっふっふ。対策に抜かりなしなのだ」

えっへん。と両腕を前で組みながら質桜さんは決めてくる。

事実、彼女は勉強が出来ない位置からはかけ離れていた。

テスト時には上から両手で足りる順位に入り、かといってそれを自慢する所か他の人に秘訣を笑顔で教え回ったりする程の、本当に良い人だ。

更にスポーツと料理は出来、その上で明るい性格なのでクラスから

は信頼を置かれている。

「そついう心愛はどうなの？」

質桜さんはくりくりとした黒色の瞳で、興味を含ませながら僕の顔を覗き込んでくる。

可愛い顔が間近まで迫って来ているので、僕は苦笑いをしながら答えた。

「いつも通りの中の上だよ」

人から恨まれず、それでいて文句の言われない位置。変化が少なく少し勉強するだけで良かったので、楽だった。

「ほむほむ」

質桜さんはこういった事からクラスの委員長を務め、僕も彼女の友人という事で同じく委員長になっているのだけだ。実はもう一つ理由がある。

「私と契約して学力を上げようよ！」

それがこれだ。

スラリとした体つきに整った顔、文武両道に人付き合いは良い。

ただ、彼女は極度にアニメやゲームといった2次元の物が好きなので、一部の人以上は根本的には付き合えない。

引かれている訳ではない、むしろそれすら彼女はステータスにする。しかし委員長などの相棒となると話は違う、それで僕に白幡がたった。

それだけの話。

「いや、契約すると僕が危ないよ」

僕の苦笑いに、彼女はにしし。と笑ってくれる。

僕はこれでいい。

例え偽りだろうと、変化のない普通を過ごせるのなら。

6月24日「家」

今日もいつも通り自分の家に辿り着き、玄関のドアを開けて家へと入る。

「あら、心愛さんお帰りなさい」

声と共に視界に入ったのは、ほわほわと辺りにタンポポでもあるかのように、柔らかく暖かな春の雰囲気を纏っている女性。
母さんだ。

「ただいま、母さん」

心の底からの笑みに、僕は作り笑いで答える。

くまさんが書かれたエプロン姿に、お鍋のお玉を片手に持っていた母さんは、にこにこしながらこう声を掛けてくれる。

「今日はすき焼きだから、早く手を洗って食べにいらっしやい」

優しい。本当に僕のお母さんにしては惜しすぎる程に。

「うん」

僕は頷いて、靴を脱ぎながら廊下へと上がる。

素早く自室にカバンを置き、洗面所で手洗いを済ませてリビングへと向かう。

「おう、おかえり」

四角のテーブルについている四脚椅子に座っている男性が、僕に気付くなり白い歯を見せながら笑ってくれる。
父さんだ。

「ただいま」

僕もつられず、いつもの笑顔でいつもの席へとつく。
テーブルの上ではグツグツと良い匂いを漂わせているお鍋が一つ、
お椀が三つ置かれている。

「はーはっはっは、今日はすき焼きだ！！ 驚いたろう！？」

「うん、母さんから聞いた」

「えっ、てことはお前、驚かなかったのか…！？」

「うん」

「ま、マジか…。そうだよな、お前ももう…」

僕には分からない何かを悟ったらしく、父さんはどこか遠くを見つめ始めた。大丈夫かな…。

「はいー」

ニコニコとほんわか笑顔を醸しながら、母さんがお椀につがれたご飯を持ってきてくれた。

「あ、すいません。手伝えなくて…」

僕が謝ると、母さんは椅子に座った後に答える。

「いいんです。いつも手伝ってくださってるんですから、今日くら

いは何もしなくて」

「そうだそうだ、たまには休め」

「…うん、そうだね」

その後はすき焼きを家族で食べた。味は母さんが僕達の好みにあわせていたので、箸が止まる事もなかった。

こんな日が、いつまでも続けばいいのに。

6月24日「自室」

ここまでは、いつもと変わらなかった。他愛のない、それでいてとても大切な日常。

よくマンガやゲームの主人公は日常の変化を望む。強くなりたかったり、新たな刺激が欲しかったりと様々な理由で。

僕も日常が変わったらな、と思った事もあった。
あんな事を起こさなければ…。

「……」

僕は早めに勉強を切り上げて、部屋の隅にあるパソコンを立ち上げた。勿論ゲームをやる為だ。

現れるのは黒い画面、次に青、最後にいつものデスクトップと無数のフォルダやショートカット。——のはずだった。

「え？」

確かにいつものデスクトップ、しかし数える程しかないフォルダの中に、見覚えのないフォルダが一つ混ざっている。

フォルダ名は、

「game……」

覚えがない、一切。

誘われるようにカーソルをフォルダに合わせ、ダブルクリックする直前で止めた。

「あ、危ない。確認もせずクリックしそうになった」

この中にウイルスが入っていないという保証はない。…というより、ウイルスが入っている方が見覚えがないのも頷ける。ネットでは勝手に侵入して偽装フォルダを作つて――、それなら最初から侵入している時点でウイルスを撒けばいいんじゃない？。

そんな僕の疑問に答えるかのように、画面に映つたウイルス探知プログラムが異常なしと言つていた。

「それなら、これはなんなんだ？」

若干疑うようにgameへとカーソルを合わせ、ダブルクリックする。

この時の行動を、僕は後に後悔する事になるとは露知らずにだ。

「起動プログラムと、データだけ…」

中身は拍子抜けするものだった。データとそれを起動するだけのプログラムの2つしか入っていない。

そして僕は、どうせデータの中身も大した事もないのだろう。と心の中で隙を作つて、そのゲームを起動してしまった。

6月25日「朝、自宅にて」(前書き)

がついた話はゲームです。

6月25日「朝、自宅にて」

朝。

「心愛さーん、質桜さんがやって来てますよー」

母さんの声が聞こえた。

僕はもぞもぞと毛布の中で動き、それから頭の近くにあるであろう目覚まし時計を手で探す。

感触だけを頼りに掴みとって自分の正面へと持ってきた。

どうやら時計であっていたらしいけど、短い針が指し示している数字に目を疑う。まだ寝惚けてるのかな。再度目を擦って見る、変わらない。

「……」

無言のまま起き上がって、ベッドから降りる。

朝の4時。

こんな朝早くから質桜さんは何の用だろうか。

心愛と書かれたプレートが貼られているドアを開け、少しだけ冷えた床を歩きながら階段を下りた。

「——い、いえ私そんな」

リビングから質桜さんの声が聞こえる。母さんが上げたのだろうか。

「ふふふ」

「あれっ、もう悟った顔されてる!？」

いざ部屋に入ってみると驚愕の表情をしている質桜さんと、微笑みながら彼女を見ている母さんが見えた。

「おはよう、質桜さん」

僕はまた笑みを使う。

こちらに気付いた質桜さんは艶のある黒髪を左右に揺らしながら、ぱあっと花でも咲かせるかのように笑顔を返してくれた。

「おはようっすー!!」

統一性のない言葉、よく彼女は脈絡も無くこういった語尾や口調になる。きっとその場のノリで使っているんだろう。

「あははー、髪ばさばさだね。心愛」

綺麗に揃った白い歯を口端に少しだけ覗かせながら、今度は悪戯っぽい笑みを見せた彼女のお腹が不意に、

くきゅうー。という控えめな可愛らしい音を鳴らした。

「——っ!？」

彼女は途端に顔を真っ赤に。

「ち、違うのっ!！」

右手を顔の前で振らしながら言い訳を口に出す。

僕はそんな様子を見て笑い、
大切する。と思った。

《S a v e 0 1》

6月24日「自室2」

“game” 起動当初に現れたのは真っ黒なウィンドウだった。

それに映しだされたのはタイトル画面と思わしき静止画。青い空に、ちらほらと白いわたあめのような雲が棚引く綺麗な背景。それらをバックに「はじめから」「ろーど」「くいつくろーど」「えんていんぐりすと」「おぶしょん」といった五文字が縦に間隔を空けて縦に書かれている。

そこはまだ普通だった。

「はじめから」をクリックすると、途端にタイトル画面は切り替わり、現れたのはどこかの部屋らしき背景と画面下の青いバー。

「シミュレーションゲーム…?」

バーには「せーぶ」「ろーど」「くいつくせーぶ」「くいつくろーど」「おぶしょん」と先程とは異なる二文字が混ざり、小さく控えめに横に書かれている。

「…あれ?」

そこで違和感を感じた。

この画面の背景どこかで見た事あるような…。

木目の入った焦げ茶色のクローゼット、白というよりは水で薄めたかのようなちよつと淡い黄土色の壁紙、正面には長い机と丁寧に置かれた本と、パソコン。

「これ…、僕の部屋だ…」

わざわざ確認しなくても分かる。明暗に差はあるけれどこれは間違いない僕の部屋だ。

恐る恐る僕はマウスでクリックすると、バーに白いフォントの文字が左から右に現れた。

一通り眼を通し、再びクリックする。

カチカチ、カチカチ、と機械音を部屋に木霊させどんどん読み進めていった。

「……っ」

どうして、僕なんだ。

ゲーム内は6月25日、明日の日付。主人公はやってて分かったけど“僕”だ。

これが神様がくれたゲームで、僕の未来を示すシナリオでも、誰かの悪質な悪戯でも、——興味がない。

僕は『セーブ』をクリックする。すると画面がまた切り替わり、『No, Save』と書かれた一覧が現れた。

一番上へとセーブを終え一段落着くと、吐く息と共につい零してしまった。

「…どうして、僕なんだ」

脳裏に焼き付いた“あの映像”がちらつく。

「変化なんてもうまっぴらだ!!」

思わず叩きつけそうになったパソコンをすんでの所を押し留め、
な
んともいえない気持ちになりながら寝た。

6月25日「自宅」

朝。

「心愛さん、質桜さんがやって来てますよー」

母さんの声が聞こえた。

「——っ!？」

僕は寝ていたはずなのに、嫌に脳に響いて目を覚ます。

それは冷たい水を被って爽やかに意識を覚醒させるのとは真逆の気持ち悪さ。

「……」

原因は分かりきっている。

昨日“game”をプレイした事によって僕は劇的な変化に巻き込まれるかもしれない、という確信にも似た疑念を抱いてしまった。無言のまま起き上がって、ベッドから降りる。

頼むから杞憂であって欲しい。

心愛と書かれたプレートが貼られているドアを開け、少しだけ冷えた床を歩きながら階段を下りた。

「——お料理が上手ね、これも心愛さんの為かしら」

リビングから、『母さん』の音が聞こえた。僕は胸をなで下ろす。良かった、少なくともあのゲームが劇的な変化をもたら——

「い、いえ私そんな」

した。

「ふふふ」

「あれっ、もう悟った顔されてる!？」

ゆつくりと部屋に入ってみると驚愕の表情をしている質桜さんと、微笑みながら彼女を見ている母さんが見えた。

「おはよう、質桜さん…」

僕は笑みを使ってみる、使えているかは分からない。

こちらに気付いた質桜さんは艶のある黒髪を左右に揺らしながら、ぱあっと花でも咲かせるかのように笑顔を返してくれた。

「おはようっす!!」

統一性のない言葉、よく彼女は脈絡も無くこういった語尾や口調になる。きつとその場のノリで使っているんだろう。

——やめて。

「あははー、髪ばさばさだね。心愛」

綺麗に揃った白い歯を口端に少しだけ覗かせながら、今度は悪戯っぽい笑みを見せた彼女のお腹が不意に、

くきゅー。という控えめな可愛らしい音を鳴らした。

——やめてよ。

「——っ!？」

彼女は途端に顔を真っ赤に。

「ち、違うのっ!！」

右手を顔の前で振らしながら言い訳を口に出す。

——やめてくれよ!!

僕はそんな様子を見て、
呟いた。

「…どうして、僕なんだ」

そんなの、分かりきっている。

僕は日常を失ったあの日から、普通に戻れる訳がない。
好きだった少女を殺してしまったあの日から…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0282ba/>

未来シミュレーションゲーム

2012年1月4日12時54分発行